

## ジュール・ヴェルヌの「驚異の旅」が成立するまで —その文化的背景を中心に

石橋 正孝

« Every thing was going wrong with him, and an idea entered his head that he might as well go and look for Sir John Franklin at the North Pole, or join some energetic traveller in the middle of Central Africa. »  
Anthony Trollope, *Orley Farm* (1861)

北極の地図に名を残すこと以外に生きるに値することは何もない<sup>1</sup>。  
アルフレッド・テニスン

…火から生じたあらゆる生は中心に存する火に引き付けられる。  
ジェラルド・ド・ネルヴァル「暁の女王と精霊の王ソリマンの物語」

編集者ピエール＝ジュール・エッツェルが出版したジュール・ヴェルヌの全小説は、連作「驚異の旅」を構成するとされているが、いうまでもなく、このような大規模な連作が当初から企てられたわけではない。その成立に当たっては、過去にバルザックの『人間喜劇』の出版を牽引した経験を持つエッツェルの意向が大きく作用したとはいえ、ヴェルヌ自身の側に明らかにそれと合致する——否、それを凌駕さえする——自然発生的な創作上の運動があり、両者の相乗効果の上に、一八六六年に連作開始の宣言ともいえる「編集者序」を冠した挿絵入り八つ折り大判の『ハテラス船長の航海と冒険』が刊行されたのであった。ここで注意すべきは、『ハテラス』がヴェルヌの事実上のデビュー作『気球に乗って五週間』に続く第二作であり、この時点ですでに第五作に当たる『グラント船長の子供たち』がエッツェルの刊行する雑誌「教育と娯楽誌」に連載されていた事実である。ある意味で『グラント』以前の四作では作者も編集者も漠然とした方向性は共有していながらも手探り状態にあったと見てよく、この第五作で真の意味の共同作業が開始されたと考えられる。したがって、「驚異の旅」の成立を語るには、最初の四作の生まれた経緯を作者と編集者の両方の側から考察した上で、『グラント』における両者の共同作業を分析する必要が最低限ある。本稿はこの三段階のうち、『気球』『ハテラス』から『地球の中心への旅』を経て第四作『地球から月へ』が一連の創作衝動の中で生み出された過程を、特にその文化的な背景に注目して幾らかなりとも解明することを課題とする。

本論に入る前に『気球に乗って五週間』の決定的な重要性を改めて確認しておく必要がある。この小説でヴェルヌはアフリカの地理学的描写を小説形式で行うべく、それまでの無数の探検家の業績を要約しつつ、その間の空白をフィクションで

繋ぎ、アフリカに関して西欧の持つ知見全体の一望を目指した。この目的に奉仕する小説的装置として採用されたのが気球である。気球によって初めて可能になった上空からの視線だけが必要とされたのではない。主人公サミュエル・ファーガソンはそのヴィクトリア号の操作性を可能な限り高めたとはいえ、気球を完全に操縦可能にすることは原理的に不可能と断言している。東から西へという大陸横断の方向性そのものは貿易風が保証しているとして、最大の目的であるナイル川の源泉も含め、旅行者が見るもの、それ以上に見るべきではないものを決めるのは気球の気紛れな意志(ないしその不在)に懸かっている(この点で気球に最も似た存在は『海底二万海里』のネモ艦長である)。ファーガソンの友人ケネディが「見てはいたが、すべてを見るには彼の目の数は足りなかった<sup>2)</sup>」というのも、気球が特権的な視点を提供すると同時に脅かすからであって、不断に煽られる欲求不満の中にアフリカに関するありえない「すべて」が欲望の対象として意識される。「アフリカを横切ることだけが問題なんじゃない、見なければならぬんだよ<sup>3)</sup>」というこの「見ること」と「横切る」ことの対立関係において知がエンターテイメントとなるのである。知の断片性と虚構を活気づける全体化への欲望の間のこうした戯れを組織すべく、ヴェルヌはこの後もこの対立を様々な形で変奏していくが(例えば特定の目的に囚われたモノマニアックな人物——例えば『八十日間世界一周』のフィリアス・フォッグ——とそれに引きずられる好奇心の強い視点人物——フォッグの従僕パスパルトゥー——というふう)、『気球』の完成度には遂に達していない<sup>4)</sup>。児童向けの雑誌「教育と娯楽誌」の創刊を準備していたピエール=ジュール・エツェルがこの小説に目を留めたのは当然だった。出版された『気球』の成功を受けてエツェルが新雑誌創刊号からの連載用に事実上「注文」して書かれた作品、それが『ハテラス船長の航海と冒険』であった。

## 1 気球から「神に次ぐ支配者」へ

ジュール・ヴェルヌの小説第二作である『ハテラス船長の航海と冒険』が第一作である『気球に乗って五週間』の延長上にあるのは明らかである。両作は共に、「『ユニオン・ジャック』を世界のあんなにも多くの点に立ててきたこの国家〔英国〕の勇気と進取の気質<sup>5)</sup>」に対する(皮肉を交えた)頌歌であり、固有名詞や付随する細部を変えれば、『ハテラス』の次の結論はそのまま『気球』の結論としても通じるだろう。

この比類なく先例のない旅行は、北極周辺地域のただ中で行われたそれまでの発見をことごとく集約し、ペリー、ロス、フランクリンらの遠征を結び合わせた。それは、経線の百度から百十五度の間において、北極地方の地図を補足し、最終的には、それまで到達不可能だった地球のあの一地点、北極点自体にまで到達したのである<sup>6)</sup>。

もし、『気球』と同じ原理に従って別にもう一作小説を書かなければならないとすれば、目的地に関する限り、選択の余地はほとんどない。ヴェルヌと同じ状況に置かれた者は誰も同じようにしただろう。バートンとリヴィングストンのアフリカに続くのは、当然ロスとフランクリンの北極でしかありえない。エピソードとして引いたトロロープの小説の一節<sup>7</sup>が示すように、多くの大衆にとってこの二つの目的地は相互に置き換えが可能だった。失うものがもはやなにもなく、なんらかの大義に挺身しようと望む若者は、戦争に行く代わりに、西欧諸国、とりわけその代表者をもって任じた大英帝国がその征服を自らに義務づけたこの二つの地点のいずれかに赴くことを考えたのである。イギリスの拡張主義の旗振り役を務めた王立地理学協会によって鼓吹された遠征の推移を人々は大きいなる興味をもって見守っていた。北極にせよ、アフリカにせよ、血沸き肉踊る冒険と新奇を約束する記号である点で大した違いはなかった。このような文脈においてヴェルヌは最初の二つの小説の主人公にイギリス人を選んだのであった。

アフリカと北極が大衆の想像の中で等価であったとするならば、ヴェルヌの二つの小説の順番もその作品史において逆にすることは可能なのかといえ、そうした想定は極めて困難であるように思われる。『ハテラス』は『気球』から生じえるが、逆は考えにくいのではないか。北極点があまりにも多くの文化的意味を担わされているため、ナイルの水源のようにただ素通りするだけでは到底すまされないからだ。地球上の一点に絶対的な固着を示しているハテラスのような者から操縦不能の気球を使うという発想はまず出てこないだろう。ハテラスと気球は互いに排除し合う関係にある。気球が『気球に乗って五週間』の啓蒙装置としてのこの上ない完成度を可能にしたとすれば、「横切る」ことが問題ではなくなって初めて「至高点」が啓蒙という同じ目的から必要になるのである。

「至高点」が気球に対して二次的であるからといって、『ハテラス』がヴェルヌの全作品において特別な位置を占めていることに変わりはない。この小説の重要性は、「英雄としての船長」という、ヴェルヌがその後も繰り返し扱うことになるテーマの発見から来ている。ヴェルヌにおける「自然の指導者(chef naturel)」は、この形容が『神秘の島』の技師サイラス・スミスに宛てられているだけに、技師であると見做されてきた。しかし、ヴェルヌが船長に寄せる讃嘆の念は技師に対するような通り一遍のものではない。彼は、船長の理想像、というよりもむしろ「神に次ぐ支配者(maître après Dieu)」という定型で彼が表現するのを好んだ船長の絶対的な立場に魅せられていた。「青少年時代の思い出」で、幼い頃の彼が無人の帆船に忍び込んだ時の思い出が語られる中に次のような条りがある。「そして、船長の居室、そう、『神に次ぐ支配者』の、いかなる王国大臣や王国総司令官とも違う人物の居室なのだ<sup>8</sup>」。

ジョン・ハテラスはかくて、恐ろしくも魅惑的なヴェルヌの船長の系譜に連なる最初の人物である。彼の「北極の狂気」がフォワード号を難所へ引きずっていく。成功をあくまで独り占めすべく、ケルンを築いたり、予備の船を伴うといった最低限の用心も拒否し、長い冬籠りに備えて石炭を節約すべきだという部下の忠言にも耳を貸さず、その結果越冬中に燃料が枯渇しても船を燃やすことを許さない。少数

の忠実な仲間を支えられているとはいえ、ハテラスは基本的には一人で戦わなければならない——苛酷な自然に対する、船員の不満分子に対する、前途への不安や、彼が引き起こした部下の苦しみや死に対する同情といった、彼自身の人間性に対する戦いを。自分自身の狂気の犠牲を前に怯むようなことがあってはならず、それは彼が一人で背負うべき重荷なのである。船員の一人がまさに息絶えんとする刹那にハテラスに放つ糾弾の眼差しを彼が受け止める恐ろしいシーン（「シンプソンは蒼ざめた。突然、最後の努力を振り絞って彼は半ば身を起こし、彼をじっと見つめるハテラスに拳を突きつけ、引き裂くような悲鳴を上げて威嚇を最後まで行うことのないまま息絶えた<sup>9)</sup>」）が物語の中盤にあるが、この瞬間、ハテラスは「猛り狂った暴風の中で屹立し、不動の姿勢も不吉に、極北の精霊のように<sup>10)</sup>見え、彼の熱心な支持者であるクローボニー医師にすら「一種の恐怖」を覚えさせる。こうしたハテラスがわれわれにもう一人の精霊——北極ならぬ「海の精霊<sup>11)</sup>」たる『海底二万海里』の主人公ネモ艦長を思い出させるのはいうまでもない。

船長の形象、および船というマイクロコスモスにおけるその立場の絶対性に魅せられた十九世紀の作家はヴェルヌだけではない。当然ハーマン・メルヴィルとその『白鯨』のエイハブ船長の名が挙がる。多くの点で、ハテラスはネモよりもエイハブと比較されるべきだろう<sup>12)</sup>。一方が北極に取り憑かれているとすれば他方は白鯨に取り憑かれているのだし、彼らは共に船員にその意図を受け入れさせるべく奸計を用いるのである。

ハテラスとネモの最大の違いは、従って、後者の部下が主人に身も心も捧げている点にある。ネモは「神に次ぐ支配者」そのものなのであり、部下のこの自発的隷属状態によって彼はノーチラス号の魂となる。「固唾を吞ませる一瞬だった。船上には断固として冷静な心臓、船長のそれが一つあるだけだった<sup>13)</sup>」。ハテラスにとって例外的なこうした瞬間はノーチラス号の日常に他ならない。これこそが、潜水艦に幽閉された語り手の一行に対してネモが気球の役割を果たすための絶対条件なのだ。『海底二万海里』は『気球』と『ハテラス』を一作の内に兼ね備えているのであり、この作品がヴェルヌの傑作にならないはずがなかったのである。

## 2 フランクリンの影

国籍の問題もまた、フォワード号の主とノーチラス号の主を分かち重要な点である。ネモの国籍が伏せられ、あらゆる文明国への帰属が拒絶されているのに対し、ヴェルヌはハテラスの企図の国粹主義的な側面をカリカチュアになるまで誇張している。この国粹主義は歴史的現実の反映でもある。ヴェルヌはフォワード号の出航の日にちを執筆時点の三年前、一八六〇年四月五日に設定している。その前年である一八五九年とは、北極探検の画期に相当した。フォックス号を率いたレオポルド・マクリントック船長がこの年の九月に二年半ぶりに北極遠征から帰還し、北西航路を求めて出帆したものの一八四五年七月以来消息を絶っていたジョン・フランクリン卿とその一行のその後がようやく明らかになったところだったのだ。この失

踪は十九世紀において最も耳目を集めた事件の一つだった。西洋社会全体が彼らの運命を案じ、英国海軍は威信を賭けて再三再四捜索隊を派遣したにも関わらず、完全な徒労に終わっていた。しかし、この悲劇はそのヒロインたるレディ・フランクリンなくしてここまで人々の関心を集めることはできなかっただろう。この現代版『オデュッセイア』のペネロペーは、彼女のオデュッセイウスの帰国を座して待つような真似はせず、フォックス号は彼女が私費を投じて派遣した三番目の捜索隊に当たっていた。『ハテラス』の第一部第一四章は、「フランクリン捜索の遠征」と題され、クローボニー医師によって以上の経緯の詳細が語られている。彼がいうように、「フランクリンの不幸な遠征は、結果としてこの遙かな地方をわれわれに知らしめた<sup>14</sup>」のであった。

つまり、ここにあるのはジュール・ヴェルヌの小説そのものなのだ。ヴェルヌの登場人物の多くが肉親を探して旅に出ることはよく知られている通りで、ヴェルヌ自身、一八九八年にエツェルの息子ルイ＝ジュールに宛てた手紙の中で、父親を捜す娘を主人公とする『すばらしきオリノコ川』について、「笑ってもらって構わないよ、親愛なるジュール。私は父親を捜す子供たち、子供を捜す父親たち、夫を捜す妻たちとはこれを限りにきっぱり縁を切った。『オリノコ川』がこの手のものの最後になる<sup>15</sup>」と書いている。レディ・フランクリンは一八九一年に出版された『ブランカン夫人』のモデルとなるし、一八五五年にすでに中篇『氷の中の冬籠り』でヴェルヌは叔父と姪がそれぞれにとって息子であり婚約者である若者を捜して北極地方に赴く物語を発表している。

フランクリン事件がヴェルヌ的なのはそれだけではない。この作家のオブセッションの一つであったカニバリズムの要素も含まれていたのである。フランクリン隊の生き残りが「人肉食というおぞましい手段で露命を繋ごうとした<sup>16</sup>」スキャンダラスな事実は、ハドソン湾協会の医師ジョン・レーが海軍省に宛てた一八五四年七月二九日付書簡がその年の一〇月二九日付タイムズ紙に掲載されたことで人々の知るところとなっていた。この一報の齎した衝撃は今日のわれわれの想像を超える深刻なものであったようだ。自然に勝利しようという文明の驕りに対するこの痛撃の波紋を、谷田博幸がその『極北の迷宮——北極探検とヴィクトリア朝文化』<sup>17</sup>において、特にレーと彼の信用を落とそうとしたチャールズ・ディケンズの論争を通して跡付けている。谷田によれば、マクリントック隊の報告の最も分かりやすい効果は、フランクリンがカニバリズムの嫌疑を晴らされたことで彼を北西航路の発見者に仕立てようとする動きが加速した事実認められる。フランクリンを美徳の権化かつ英国の誉れとし、彼の遠征の極めて疑わしい成果をあたかも彼個人にのみ帰せられるかのように思い做すことは、カニバリズムの悪夢を忘れる格好の方途だった。谷田は、フランクリンが英雄崇拜の対象に祀り上げられるこの時期が、北極熱が冷めてアフリカに人々の関心が集中する時期と重なり合っている事実に注意を促している。この暗黒大陸に関して、サミュエル・ファーガソンのそのような無茶な提案でも喜んで耳を貸す準備が人々の間にできていたというわけなのだ(ファーガソンが王立地理学協会に彼の計画を発表するのは一八六二年一月一四日ということになっている)。

クローボニー博士は、フランクリン捜索に関する彼の物語を、この北極の人気失墜の確認をもって締めくくっている。「以上が、この不吉な一帯で過去十四年間に起きたことだ。フォックス号の帰還以来、この危険な海域で運試ししようとする船は一隻もなかったんだよ<sup>18</sup>」。奇妙な発言である——問題の帰還以来、一年と経っていないのであり、しかもこの時期は北極地方の長い夜に当たっていて、遠征には全く不向きな季節なのだから。だが、ヴェルヌ自身は、この北極遠征の中断の意味が明らかになるには十分な時間が経った時点でこの発言を書いていた。フランクリン失踪の謎が解き明かされた今、この地方の探検に国家の力を頼ることは——少なくとも当面は——望むべくもなく、北極点まで人を駆り立てるのは個人の熱意しかない、ということである。翻って、フランクリンが対象となった個人崇拜は、カニバリズムが白日の下にした危険を探検家たちが冒した理由を事後的に説明することにも役立ったのではないか。ハテラスはこうして成立したイデオロギー的な英雄の概念に文学が呼応した結果なのではないか。ハテラスはこの資格においてフランクリンが残した空白期間を埋めるのであって、ライヴァルではないかと彼が疑心暗鬼の目を向けるアメリカ人アルタモントとの関係において彼の国粹主義的傾向が妄想に接近するのは、イギリスが撤退した後の空白が他国にとって誘惑的に映るのではないかという病的な懸念によるのではないか<sup>19</sup>。

ファーストネームを共有するフランクリンとハテラスの連続性を支持する事実が二つある。フランクリン隊最後の生き残りの残骸発見の経緯を部下に語るハテラスは、彼らがこうした悲惨な末路を迎えたのは彼らが北ではなく南に向かったからだと断言し、「それでも諸君は彼らの跡を追おうとするのか<sup>20</sup>」と煽動する。ロジェ・ボルドリーによれば、このハテラスの演説は、あのジョン・レーの手紙をほぼ一字一句書き写したものに他ならず<sup>21</sup>、ハテラスの暗い情熱は西欧社会にとって爆弾だった一件から少なくともその一部を受け取っているのである。加えて、草稿段階における小説の末尾では、ハテラスははっきりフランクリンと結び付けられていた。『北極におけるイギリス人』と題され、王立地理学協会の手で翌年に刊行された旅行記の中で、クローボニー医師は、ジョン・ハテラスをフランクリンに匹敵するとした。彼らは共に科学のための大胆な犠牲者なのだから<sup>22</sup>。最終的に「フランクリン」が「最も偉大な探検家たち<sup>23</sup>」に変えられたのは、草稿と違ってハテラスが北極点の火山に身を投げず、正気を失って英国に連れ帰られる結末に変えられたからだが、以上の簡単な考察からも、二人の共通点が単に北極探検で命を落とすという点だけに留まるとは思えない。

### 3 「至高点」の啓示

ハテラスは同国人のライヴァルを恐れる必要がない分他国のライヴァルに敵愾心を燃え立たせるのだとすれば、この状況は、彼の真の意図を国粹主義的動機の裏に隠すことができるという点で好都合だったのではないか。ハテラスは、その企てがあまりに私的である事実を糊塗すべく、過度の国粹主義を必要としたのである。

一九四九年に発表された「ジュール・ヴェルヌの幾つかの作品を通して見た至高点と黄金時代」において、ミシェル・ビュートルは、北極点に初めて英国国旗を立てんというハテラスの目論見は「見かけ」にすぎず、「この横糸の下にはもう一つ別の横糸が<sup>24</sup>」あると書いている。「彼〔ハテラス〕は彼自身のうちに熱い炉を持っているんだよ」「彼の近くに寄ったら、燃える石炭の側に行った時のように暑くなったとしても私は驚かない<sup>25</sup>」というクローボニー医師の発言を引きつつビュートルが指摘するのは、ハテラスが一個の火だということである。そうだとすれば、正確に北極点上に位置する火山とは、ハテラスがそれに一致することを欲し、その中に生まれ直すことを望む高次の生ということになる。

この観点から見る時、『地球の中心への旅』に関するマルセル・ブリオンの次の評言はそのままむしろ『ハテラス』にこそ当てはまる。「探求の理由は、あらゆる秘儀伝達の旅同様、中心の探求であって、『中心』とは、探す者と探されるものが出会い、互いの同一性を結論付ける点に他ならない<sup>26</sup>」。しかし、ビュートルも指摘するように、「ハテラスは北極で火を見つけると初めから知っていたわけではない<sup>27</sup>」。そこから、北極点の特異性の象徴的価値にビュートルは優位性を認める。ハテラス山の火がその至上の意味——聖性——を受け取るのはその地理学的位置からだということである。アンドレ・ブルトンの「第二シュールレアリスム宣言」(一九二九年)から借用されたこの「至高点」という概念は、「対立物の解決<sup>28</sup>」する場所であって、これはミルチャ・エリアーデが聖性に与えた定義と一致している。エリアーデに拠れば、太古の人々は「世界の中心」で「聖なるもの」と接触できると考えていた。この点には、宇宙山なり宇宙木なり中心の軸なりによって象徴される、天と地の紐帯が見出される。エリアーデは、「西洋的な科学精神の幾何学的含意<sup>29</sup>」に囚われて「中心」が一つしかないと思ふことのないよう戒めている。それは複数ありうるし、潜在的にはすべての住居が「世界の中心」たりうるのだ。対するに、「西洋的な科学精神の幾何学的含意」が骨がらみになっているヴェルヌにあって、それは字義通りに受け止められねばならない。つまり、地球の中心こそ「その特質が〔両極よりも〕さらに旅の目的にふさわしくしているもう一つの点<sup>30</sup>」となる。が、「特質」だけで事は足りるのだろうか。

例えば、ルネ・ドーマルの未完の遺作『類推の山』(一九四四年)の語り手にとって、「われわれの惑星の中心なり軸なりを意味すること」だけでは、ある山が彼のいう「類推の山」となるには十分ではない。それは「大地と天を結び合わせる道」でなければならず、「その頂上は到達不可能であるが、麓は自然が作ったままの生身の人間にも到達できなければならない<sup>31</sup>」。要するに、「地理的に存在しなければならぬ<sup>32</sup>」。語り手自身認める通り、この最後の一文は二通りの解釈が可能で、概念としての類推の山一般の定義を述べていると取るのが普通だが、到達不可能な未知の地方が残っていない現在のこの世界に愚直に当てはめれば、空白を持たない地図に到達不可能な地点がなければならぬという二律背反の解決の要請となる。ところで、この要請はすでにヴェルヌにも存在している。事実、ヴェルヌにおいて極点がかくも魅力的なのは、地理学的に特定可能でありながら到達できない地点の代表だったからではないか。極点は到達可能であると同時に到達不可能でなければ

ならず、火は到達不可能性を表現し、論理的に存在していなければならないのだ。「至高点」は二律背反一般のみならず自らの存在論的二律背反をも解決していたのである。

しかし、以上がすべてであれば、北極点のこの火は機能的なものでしかなく、その聖性が地理学的なポジションに由来することは動かない。それは到達不可能なものへの通路でなければならない。この場合、地球中心の火こそその到達不可能なものでなくて何であろう。両極を地球の中心と結びつける発想自体は極めて古くからあるが、この観念連合を決定的に強化したのが十七世紀のアタナシウス・キルヒャーであった。エトナ山の火口に下りたこともあるこのイエズス会士は、海水が北極の穴に吸い込まれ、地核の火の作用を然るべく受けた後、南極の穴から排出されると考えていた。それからというもの、極点の穴はコラン・ド・プランシーからエドガー・ポオに至る多くの人々を魅了し、ヴェルヌ自身、『ハテラス』の中の北極点の位置する島でクローボニー医師にこのアイデアを論じさせ、遠心力で赤道より地球の中心に若干近いこの地点から地球の中心に旅立つべきではないかと軽口を叩かせている<sup>33</sup>。が、北極の火山の真に意味するところはこの小説を執筆中のヴェルヌ自身にも明瞭には解っていなかったのではないかとすれば、ハテラスだけではなく、ヴェルヌもまた中心の火の呪縛下にあったと考えなければならない。『地球の中心への旅』におけるヴェルヌの創作上の自由度の高さは、この呪縛からの解放の表れと解釈しない限り、うまく説明できないように思われるし、事実として、この小説の構想は『ハテラス』執筆後に突発的に生じているのである。一体何がこの解放を齎したのだろうか。一般に、『地球の中心』構想のきっかけは、シャルル・サント＝クレール・ドゥヴィルとの会話およびジョルジュ・サンドの小説『ローラ』にあったとされる。エッツェルによって紹介された地質学者の前者（ちなみにその弟のアンリは史上初めてアルミニウムの工業的精錬法を発明し、それは『地球から月へ』で砲弾製造に採用されている）は、「ヴェルヌがその主人公たちをそこから地上に脱出させるストロンボリ山の火口の中に下りたことがあり<sup>34</sup>」、火山は地下で互いに連絡しているのではないかと考えていた（この発想はキルヒャーに近い）。サント＝クレール・ドゥヴィルがヴェルヌをして自らが書いた北極の火山の火口から噴出する火が地球中心のそれであることに卒然と思ひ至らせたとすれば、『ローラ』はこの解放を後押ししたと考えられる。ロマン派文学において、中心の火ないしそれを封じ込める鉱石は常に生身の人間には禁じられた究極の知と結び付けられている。サンドは、『ローラ』においてこの究極の知との関係で女性にあてがわれている役割を批判している。ヴェルヌはサンドの枠組みをそのまま用いて否定の対象を、究極の知そのものの呪縛自体にまで広げたと考えられるのだ。

#### 4 地球中心の火

ピエロ・ゴンドロ・デラ・リヴァはその論文「ジュール・ヴェルヌの靈感源としてのジョルジュ・サンド」で説得力のある仮説を立てている<sup>35</sup>。それに拠れば、

ヴェルヌは一八六四年一月一日及び一五日の『両世界評論』に分載された『ローラ』を読んだ直後に『地球の中心への旅』執筆に着手したという。事実、両作の間の類似点は多く、影響関係を否定するのは難しい。シモーヌ・ヴィエルヌ<sup>36</sup>とゴンドロ・デラ・リヴァの論文を参照しつつ類似点を整理すれば以下になる。

- 1) 主要登場人物がドイツ人である。
- 2) 彼らの間の血縁関係(叔父-甥-姪)。
- 3) 彼ら相互の関係及び属性(地質学者・鉱物学者の叔父は純粋な学者でいささか滑稽なところがあり、吃音癖があって怒りっぽく、その弟子で助手の甥は孤児ではっきりしない性格の持ち主で、彼が恋する従妹によって冒険に駆り立てられる)。
- 4) 旅の目的地は地球の中心である。
- 5) 結論として、甥と姪は結婚する。
- 6) 語り手である甥の名前が似ている(サンドの「アレクシス」、ヴェルヌの「アクセル」)。
- 7) その他共通する細部(晶洞石のコレクション、共に出発地がキール、太古の怪物との遭遇、電氣的照明の重要性、等)。

さらに共通の源泉として、サンドの友人シャルル・エドモンドの『コルヴェット艦オルタンス女王号による北洋の旅』(一八五七年)、ルイ・フィギエのベストセラー『大洪水以前の地球』(一八六三年)を挙げることもできるが、実のところ、以上の類似は二作の差異を浮き上がらせるばかりで、ヴェルヌによって意図的に持ち込まれたのではないかと疑わせる。『ローラ』は『地球の中心』より構成が遥かに複雑で、後者ではリーデンプロッカー一人が兼ねている役割に従って、吃音癖のあるチュングストゥニウス、ローラの父親を騙ってアレクシスを強引に冒険に巻き込む悪魔的な冒険家ナシアス、ローラの実の父であるクリストフと叔父が三重化しており、ヴェルヌでは旅は一つだが、サンドにおいては二つの幻覚に分けられている。そのうちの二番目の幻覚が厳密な意味での旅に当たるのだが、ヴィエルヌも指摘するように、ナシアスは北極にある穴から燦然たる宝石に満ちた地球内部(オーロラはこの内部の輝きが外に漏れて発生する)に侵入しようとするため、『ハテラス』を否応なく連想させるのである。しかし、『ローラ』が橋渡しを務めるのはヴェルヌの二作の間だけではなく、『地球の中心』とそれ以前の地下世界文学、特にドイツロマン派とジェラルド・ド・ネルヴァルの間でもあって、サンドの作品を通してこれらの作品は互いを照らし出すかのように思われる。

ドイツロマン派に鉱物が及ぼした魅惑はよく知られている。ノヴァーリスが『青い花』(一八〇二年)の中で描いた鉱夫の理想世界は直ちにその危険な裏側に覆われてしまう。地下世界の抗しがたい魅惑とその危険を定式化したのは、早逝したこの詩人の未完の遺稿を友人として出版したまさにその年にルートヴィヒ・ティークが発表した『ルーネンベルク』だった。ひとたび地下の魅力の作用を受けたが最後、そこからの避難所を安寧な世俗的生活に求めても無駄で、「崇高な永遠の幸福

を顧みず、はかない目先の幸福を手に入れようとした<sup>37)</sup>後悔に徐々に蝕まれ、遂には身を滅ぼすこととなる。この相容れない二種類の幸福は、山と平地の二つの世界と同時に、主人公クリスティアンがある夜ルーネンベルクの廃墟で一度だけ目にした超自然的な美しさの女性と、この出会いの直後に彼が出会って結婚する村の娘の二人に対応している。マルセル・ブリオンがいうように、「現実の生身の女性と幽霊(ないし女神ないし像)の間の競争は最も古く最も意味深いテーマのひとつ<sup>38)</sup>」であるのは確かだが、地球そのものをネガティブな「永遠に女性的なるもの」としたことは、太古から鉱山をめぐって形成されていた意味の網目を活性化することになった。再びミルチャ・エリアーデを参照すれば、鉱物が育つという伝統的な観念の中核には、「地球を母に、鉱山をその母胎に、鉱物を『胚』になぞらえる極めて古くからの象徴主義<sup>39)</sup>」があるという。鉱夫は「月足らずの段階での手術<sup>40)</sup>」を行って鉱物を取り出し、鍛冶師は火によってこの自然による長い熟成の過程を一気に縮めるのである。こうした驚異的な威力を発揮する火を支配することは聖性に与ることに他ならず、「原始魔術やシャーマニズムは、『火の支配』を自ずと含んでおり、治療師は炭火に触れても平気だったり、肉体の中に火を起すことができ、この『内部の火』によって『燃えるように』なったり『熱く』なったりし、極端な寒さにも耐えられるようになったりする<sup>41)</sup>」。同時に、自然に取って代わり、人間的条件を凌駕しようとするその目論見ゆえに、「火の支配」に関わる者は、ちょうど地球の内奥が「鉱物を見張り、それを意のままにする地付きの神々<sup>42)</sup>」の支配領域であるように、支配的な神に逆らう悪魔的な諸勢力と関係づけられることにもなる。大地母神は、鉱夫が彼女以外の神を信仰することは許さないのはもちろん、その性的エネルギーを彼女だけに振り向けるのでなければ我慢できない。

E・T・A・ホフマンの『ファールンの鉱山』(一八一九年)において、鉱山の所有者の娘ユッラは、彼女から婚約者を結婚式当日の朝に奪い去る「鉱山の女王」が犠牲者を誘き寄せるための撒き餌でしかないかのような印象ささを与える。実際、彼女がエーリス・フレーブムに出会えたのも、老トールベルンを介して「鉱山の女王」が船員であったエーリスに海を捨てさせ、鉱山を選ばせたからだ。女王はエーリスに「はかない目先の幸福を手に入れ」る暇も許さず、物語は彼にとっての女王の意味を発見するまでの秘儀伝達的な過程を描き出す。それは火のように輝く「アルマンディン鉱石<sup>43)</sup>」であって、地球の中心にいる女王の胸から生えているという木とその枝に絡まる彼自身の心——究極の知——を啓示するというこの宝石は地球中心の火の結晶なのではあるまいか。

地核の火がその最強度の煌きを放つ場面に立ち会いたければ、「暁の女王と精霊の王ソリマンの物語」(一八五一年に刊行されたジェラルド・ド・ネルヴァルの『東方紀行』に含まれる物語の一つ)につかなければならない。この物語は、地核の火と地球の冷却化という二つの科学的仮説を背景にしている。天才芸術家アドニラムは、ソリマンのために神アドナイに捧げる神殿の建設を請け負う。彼は青銅の海を鑄造しようとするが、それは「人間の偏見に対する、自然に対する、成功は不可能だと宣言する最高の専門家の意見に対する天才の挑戦<sup>44)</sup>」である。そのアドニラムは素足で「赤熱する金属を平気で」踏むことができ、暁の女王の目にはまるで

「火の神のように<sup>45</sup>」見える。しかし、裏切りのために彼の企ては失敗し、彼が芸術家としての権能を取り戻すためには、彼の祖先にして師匠、親方であるトバル＝カインに導かれて「中心の熱<sup>46</sup>」へ帰らねばならない。カインの末裔がアドナイの迫害を逃れたそこでは、「知恵の木の実を、命を落とすことなく味わうことができる<sup>47</sup>」。火の精霊の末裔である天才の魂は死に際してこの中心の火に引き付けられ、死後も働き続ける。彼らが「火の元素を、石に封じ込め、火花を引き出すに適した鉄ともども密かに」人間に送り届けているのであり、彼らなくして地球は「寒さで息絶えるだろう<sup>48</sup>」。

一見、『ローラ』は中心の火を否定しているように見える。この小説は晶洞石と地球の照応関係に基づいており、前者の内部に吸い込まれることは後者の内部に入り込むことでもあって、最初の幻覚でアレクシスがローラの導きで体験することがこれである。「甥」に地球中心への旅が実行可能であると納得させるためにナシアスが用いる議論は、リーデンプロックが甥に同じ目的で用いるそれと同一で、要するに地核の火など「純然たる仮説であって、そんなものは一向に気にならない<sup>49</sup>」というものだ。その一方で、「石に封じ込まれた火の元素」は、オーロラを引き起こしている宝石群——その中には「ホフマンという幻視家に歌われ、その火を自らが形作る峻厳な山塊の中心に集めている赤く熱いアルマンディン鉱石<sup>50</sup>」もある——の形で遍在する。とりわけ、ナシアスの所有する、驚くべき輝きと信じがたい熱を発する巨大なダイヤモンドがある。ナシアスはこの宝石のお蔭で北極の長い夜の闇も寒さも恐れる必要がないほどだ。ナシアスはいう、「私自身は原始の地球が燃焼状態にあったことを認め、地球の中心においてその核に相当するダイヤモンドで燃焼していると宣言する<sup>51</sup>」。彼の所有する魔法のダイヤモンドは極の穴に導くという理由で「北極星」と呼ばれている（そしてローラになぞらえられもする）<sup>52</sup> ことが暗示するように疑いなくこの中核のかけらであって、その光に当てられたアレクシスがナシアスの意志に逆らえなくなるのも、地磁気と何らかの関係があるに相違あるまい（エドモンド・ハレーやジョン・レスリー卿はそもそも地磁気を説明するために地球空洞説を提唱したのであった）。

## 5 ローラからグラウベンへ

ただ、われわれが検討した主人公たちの中であってアレクシス（そしてアクセル）だけが最終的に社会に再統合されるのであって、彼の冒険は成年を迎えるための単なる通過儀礼に帰せられてしまうように見える。なぜ彼だけは「知恵の木の実」を味見しておきながら現世での再生を許されたのだろうか。彼にはアドニラムの高貴も、クリスティアンの不安も、エーリスの暗鬱もない。とすれば、その凡庸さゆえに彼は救われたのか。

ある意味においてはまさしくその通りであって、なぜならローラの重要さの引き立て役となるためにアレクシスはぱっとしない存在である必要があるからだ。『ファールンの鉱山』に明示的な形で言及する『ローラ』はホフマンの短篇に自らを対置

している。サンドの批判的眼差しは、凡庸な日常と、悪魔的な知を共に女性になぞらえる発想に向けられている。なぜユウラは見捨てられなければならないか、絶対への渴望の悪しき側面は女性の姿を取らなければならないのか。ローラはこの二人の女性の役割を兼ねることで、この二重の女性嫌悪に応じる。蠱惑的な笑みを浮かべて水晶の中の不思議の国にアレクシスを誘うのは彼女なのであり、ナシアスによって彼が受けた試練の報いとして彼と結婚するのも彼女なのだ。いうまでもなく、ローラに悪魔的なところは微塵もなく、それどころか、彼女は水晶の中で自ら発光し、すべての悪はナシアスに押し付けられる（そしてこの二人に翻弄される一方のアレクシスの受動性は彼が語り手であることで一層効果的に示される）。しかし、ダンテのベアトリーチェならぬ生身の彼女に天上的な人格をどうして兼ねることができたのか、という疑問に対しては、いかなる人間も不滅の自我と現世的な自我の二つの自我を有しているという形而上的説明が用意されている。水晶の世界とは——従って地球の内部とは——真の自我の属する「理想の領域<sup>53</sup>」なのである。真の自我に闇雲に合一しようとする者には死が——少なくとも現世的な自我の死（それは狂気という形でハテラスを見舞ったものである）が待っている以上、生ある限り、アレクシスのなすべきことは平凡なローラをあるがままに受け入れることであり、それを彼は一連の冒険を通じて学ぶのだ。「ローラ！と私は彼女を抱き締めながら叫んだ、不吉な魔法は破られた、もう僕らの間に水晶はなく、本当の魅惑が始まったんだ<sup>54</sup>」。

『ファールンの鉱山』に対する批判という文脈と独立に読まれた場合、『ローラ』は、熱狂のあまり恋人を美化し（スタンダールのいう結晶化作用？）、幻滅して自分勝手な非難を相手に加えがちな若い恋人たちに向けた教訓話と受け止められてしまいかねず、この作品が相対的に埋もれている理由の一端もそのあたりにあるのだろう。そして、サンドによって口火を切られた地下物語の世俗化を最後まで推し進めたのが『地球の中心への旅』であることを考えれば、おそらくその世俗化によって成功を収めたこのジュール・ヴェルヌの小説第三作は、サンドの小説がますます教訓的に見えることに、つまりはその忘却に貢献したのである。『地球の中心』のグラウベンがアクセルを冒険に向けて励ますが、出発点に留まって許婚の帰りを待ち、一貫して背景に退いている。ヴェルヌの大半の登場人物同様、グラウベンはおよそ「深み」を欠いており、現世的な次元を離脱することはない。その彼女が自らを旅の純然たる目的とした時に、地下世界旅行譚の世俗化は完成した。

『地球の中心』は、『ローラ』の教訓性と同時に地下の知の呪縛を振り払うことにも成功する。というのも、ハテラスだけが中心の火に呪縛されていたのではなく、われわれの仮説が正しければ、北極の火山の意味を自覚していなかった限りにおいてヴェルヌもまたその呪縛下にあったのであり、この火の正体を悟った瞬間はまた解放の瞬間でもあったからこそ、『地球の中心』創作の動因となったのだ。この解放による自由の感覚は、ヴェルヌが自身に許した様々な大胆さに表れているように思われる。サンドからの借用もそうだし、主人公たちが徒歩で地球の中心に赴く率直さやストロンボリの噴火で地上に吐き出される結末といった荒唐無稽な設定もその例だ。中心の火の問題はといえば、叔父と甥の間で交わされる陽気な議論にも窺われるように、この観念を否定するのではなく、それと戯れることが問題になってい

るのは明らかだ。マルセル・ブリオンの表現を借りれば、「氷の中で始まって、秘儀伝達は火の中で完了し、旅の全過程を通して「中心の火」は現前こそしないが絶えず念頭に置かれている<sup>55</sup>」。結局のところ地球の中心までの千五百里のうち、四十里までしか到達できなかったのだから、中心の火のことは出発前と同様、判然としないままなのである。ストロンボリの火山から噴き上げられた叔父と甥は、狂った方位磁針のせいでアイスランド近辺に舞い戻ったとばかり思っていたところ、南国の風景のただ中に自分たちがいることが理解できず、叔父は「北極にいるのでなければな！<sup>56</sup>」と叫ぶ。ある論者によれば、地底への入り口であるスネップェル山の火口の底からアクセルが見上げた小熊座の $\beta$ とはかつての北極星に他ならず<sup>57</sup>、旧北極点に擬せられる死火山から現北極点の活火山に、ちょうどハテラスの魂とは逆方向に地上に出たとしても何の不思議もない。

リーデンプロックとその甥は、中心の火を通して火山から別の火山へ至る不可能な旅を行う旅行者の役を演じているのだ。あらゆる秘儀伝達の儀式は創造神話の生き直しである限りにおいて演劇的であるとすれば、多くの論者がこの作品に典型的な秘儀伝達のシナリオを、引いては極度に人工的な性格を見出すのは至当である。しかし、何より地下世界に関わる一つの文学的伝統全体をこの小説はイニシエーションとして生き直す。この小説くらい他の文学テクストとの関係が語られるヴェルヌの小説も他にないが、われわれが扱った作家以外にも、カサノヴァの『イソカメロン』（一七八七年）やデュマの『イーサク・ラケテム』（一八五三年）が取り沙汰される（ウェルギリウス、ダンテ、ホルベリ、ベックフォードその他多数は措いて）。ルネ・ポン＝ジュストなる人物（サーシャ・ギトリの祖父）に至ってはヴェルヌが自作を盗作したと訴えている<sup>58</sup>。確かに、そういわれてもおかしくはない細部の一致（ドイツ人の愛書家が購入した稀観書の中からルーン文字で逆向きに書いた暗号が発見され、ある一定のタイミングである事物の差す影が地下への入り口を示す）があり、当時の具体的状況からも盗用の可能性は否定しきれない。問題は、この中篇『ミメールの頭』の主人公が、地球の中心に向かうのではなく、それに問えば究極の知が明かされるという大昔のスウェーデンの賢者ミメールの頭を掘り出し、思い上がった者のためにこのような探求はあって地上の感情に満足しなければならないという「究極の知」を明かされて死ぬという点である。ここには皮肉を見るべきではなく、凡庸な作家が文学的伝統に大真面目に従った結果に過ぎないが、ポン＝ジュストが自分は地球の中心に先んじたのだと主張した時、彼の口を借りて文学的伝統そのものが語っていたのではないだろうか。

しかし、重要なのはこれら一切を下支えしていた世俗化にある。ヴェルヌの地下物語が伝統から多くを負っており、従ってリアリティに反する細部を数多く抱えながら、必ずしも幻想小説とは受け取られず、科学小説と受け取られたのは——学者リーデンプロックの科学的講釈以前に——このためなのだ。それゆえ、フォルカー・デースのように、『二十世紀のバリ』を拒否されたばかりのヴェルヌがエツェルの検閲を逃れるために取った戦略としてのアイロニーではなく<sup>59</sup>、文学的伝統に対する自由から来るユーモアをこそここに認めなければならない。ヴェルヌは『地球の中心への旅』に続いて、地下世界旅行譚と同じくらい古い伝統である月世

界旅行譚の世俗化を『地球から月へ』で行う。要するにここにあるのは一続きの同じ運動なのであり、その結果、サンドの『ローラ』がそうであったように、しばしば互いに重複していた極地方、地底、月世界への旅行譚が目的地別に分離され、地球をその総体として眺める視座が確立される。こうして地球の全表面の小説による描写という「驚異の旅」のプログラムの基礎が、気球譚に引き続いた三つの（語の真の意味における）驚異の旅によって据えられたわけであるが、この運動が多かれ少なかれエツツェルによる方向付けを受けていたとはいえ、ヴェルヌの側に自然発生的な面があった傍証として、『ハテラス』原稿完成を受けて一八六四年一月一日（『ローラ』の発表がまさにこの一月のことである）に結ばれた出版契約<sup>60</sup>がある。ヴェルヌが年に二巻分の原稿を提供する義務を定めたこの最初の独占契約は、のちにヴェルヌがガブリエル・マルセルと共同で仕上げることになる啓蒙書『大旅行と大旅行家の歴史』および『グラント船長の子供たち』の仮題である『新世界一周旅行』を近く書かれるべきタイトルとして挙げていながら、それらより先に書かれた『地球の中心への旅』『地球から月へ』には触れておらず、ヴェルヌが一年ごとに書く二巻のジャンルも性格も特定されていない。つまり、この時点では、ノンフィクションも含む包括的な地理学的プログラムという大まかな方向性しか作家と編集者は共有しておらず、この直後に突発的に生じて『グラント』を押し退けた『地球の中心』と『月』によって、小説連作として以外ありえないことが明白になったプログラムを『グラント』の世界一周が追認しているかのようである。事実、この第五作の「教育と娯楽誌」上の連載中に、編集者序文付き『ハテラス』が連作の開始を公に宣言する。作家と編集者の本当の意味での共同作業は『グラント』をもって始まったのであり、このケースを語るためには、それ以前の諸作におけるエツツェルの役割を稿を改めて分析しなければならない。

- 1 谷田博幸『極北の迷宮——北極探検とヴィクトリア朝文化』、名古屋大学出版会、二〇〇〇年、二二六頁。前掲のトロロープの一節も、本書の二三六頁に引かれているものである。
- 2 Jules Verne, *Cinq semaines en ballon*, Paris, Librairie générale française, « Le livre de poche », 1966, p.80.
- 3 *Ibid.*, p.87.
- 4 十九世紀文学におけるヴェルヌ的気球の独自性については、われわれの以下の論考を参照。Masataka Ishibashi, « Les valeurs littéraires d'un objet technique : le ballon chez Verne et quelques autres », in *Jules Verne : les machines et la science*, Nantes, Coiffard, 2005.
- 5 Marie A. Belloc, « Jules Verne chez lui », in *Entretiens avec Jules Verne*, Genève, Slatkine, 1998, p.103.
- 6 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, édition de Roger Borderie, Paris, Gallimard, « Folio », 2005, p.652.
- 7 Anthony Trollope, *Orley Farm*, Oxford University Press, « The world's classics », 1991, p.369.
- 8 Jules Verne, « Souvenirs d'enfance et de jeunesse », in *Contes et nouvelles de Jules Verne*, édition de Samuel Sadaune, Rennes, Ouest-France, 2000, p.171.
- 9 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p. 330.
- 10 *Ibid.*, p.332.
- 11 Jules Verne, *Vingt mille lieues sous les mers*, édition de Jacques Noiray, Paris, Gallimard, « Folio », 2005, p.635.

- 12 『海底二万海里』の冒頭に登場する「白鯨、北極地方の恐ろしい『モビー・ディック』」(*Ibid.*, p.54)は、少なからず物議を醸してきた。メルヴィルの小説の仏訳が出たのは一九四一年のことであり、英語ができないヴェルヌがいかなる経路でモビー・ディックの名を知ったのか、謎だったからである。雑誌『両世界評論』一八五三年一月二三日号に、Émile Daurand Forguesなる人物の手で、原作の要約というよりは物語風の短篇化に批判的コメントを付け加えた「Moby Dick : la chasse à la baleine, scènes de mer」が掲載されており、ヴェルヌがこれに目を通していた可能性はあるものの、最新の「フォリオ・クラシック」版の註でジャック・ノワレが断言するように(*Ibid.*, p.674)、Arthur Manginの*Les Mystères de l'océan* (1864)に紹介されている、グリーンランド沖合いに出現する伝説的白鯨「メイビー・ディック (Maby Dick)」がヴェルヌの念頭にあったと見て間違いない。事実、『海底二万海里』の「教育と娯楽誌」掲載ヴァージョンと単行本初版の挿絵なし一八折り判ヴァージョンでは、共に「Maby Dick」とあり、原稿でもこの綴りだったと思われる上、メルヴィルのモビー・ディックは、北極地方とは関係がない。問題は、ヴェルヌが細部に手を入れた挿絵入り八折り判の最終ヴァージョンで「Moby Dick」になっていることで、これが人騒がせな誤植なのか、著者自身の訂正なのか、現時点では全く不明である。
- 13 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.159.
- 14 *Ibid.*, p.166.
- 15 Cité par Arnaud Chaffanjon, *L'Orénoque aux deux visages*, Denys Pierron, p.8.
- 16 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, pp.195-6.
- 17 谷田博幸、前掲書。
- 18 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.171.
- 19 それゆえ、草稿段階で、北極点を目前に「中立地帯」である氷山でハテラスとアルタモントが決闘するシーンが削除されたことで、後者の存在意義が失われたとするウィリアム・ブッチャーの見解にわれわれは同意しない。William Butcher, « Verne en version originale : les véritables aventures du capitaine Hatteras », in *Jules Verne cent ans après*, Paris, Terre de Brume, 2005. また、この小説の草稿、「教育と娯楽誌」掲載ヴァージョンと現行テキストの異同については、以下のブッチャーによる批評版で詳細を辿ることができる。Jules Verne, *The adventures of captain Hatteras*, Oxford University Press, « The world's classics », 2005.
- 20 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.196.
- 21 *Ibid.*, p.675.
- 22 Olivier Dumas, « La mort d'Hatteras », *Bulletin de la société Jules Verne*, N° 73, 1985, p.24.
- 23 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.654.
- 24 Michel Butor, « Le point suprême et l'âge d'or à travers quelques œuvres de Jules Verne », in *Essais sur les modernes*, Paris, Gallimard, « Tel », 1992, p.49.
- 25 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.277.
- 26 Marcel Brion, « Le voyage initiatique », *L'Arc*, N° 29 (Jules Verne), 1966, p.30.
- 27 Butor, *op.cit.*, p.60.
- 28 *Ibid.*, p.65.
- 29 Mircea Eliade, « Symbolisme du « Centre » », in *Images et symboles*, Paris, Gallimard, « Tel », 1980, p.55.
- 30 Butor, *op.cit.*, p.67.
- 31 René Daumal, *Le Mont Analogue*, Paris, Gallimard, « L'Imaginaire », 1981, p.18.
- 32 *Ibid.*, p.19.
- 33 Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, *op. cit.*, p.623. この箇所には複数のタイプの地球空洞説に関する混乱が見られるが、これは、ヴェルヌが直接参照するか孫引きするかしたアレクサンダー・フォン・フンボルトの『コスモス』の記述に原因がある。Alexandre de Humboldt, *Cosmos*, tome I, Paris, Utz, 2000, p.173.
- 34 Daniel Compère, *Un voyage imaginaire de Jules Verne : Voyage au centre de la terre*, Paris, Minard, 1977, p.18.

- 35 Piero Gondolo della Riva, « George Sand inspiratrice de Jules Verne », *Bulletin de la société Jules Verne*, N° 137, 2001.
- 36 Simone Vierre, « Deux voyages initiatiques en 1864 : Laura de George Sand et le *Voyage au centre de la Terre* de Jules Verne », in *Hommage à George Sand*, Paris, PUF, 1969.
- 37 ルートヴィヒ・テイク、『ルーネンベルク』、鈴木潔訳、『ドイツ・ロマン派全集』第一巻、東京、国書刊行会、一九八三年、七四頁。
- 38 Marcel Brion, « Les mines de Falun : Hoffmann et Hofmannsthal », in *L'Allemagne romantique IV : le voyage initiatique 2*, Paris, Albin Michel, 1978, p.185.
- 39 Mircea Eliade, *Forgerons et alchimistes*, Paris, Flammarion, « Champs Flammarion », 1977, p.44.
- 40 *Ibid.*, p.34.
- 41 *Ibid.*, p.65.
- 42 *Ibid.*, p.46.
- 43 ホフマン、『ファールンの鉱山』、池内紀訳、『ホフマン短篇集』、岩波文庫、一九八四年、一四一頁。
- 44 Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, édition de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Paris, Gallimard, « Folio », 1998, p.695.
- 45 *Ibid.*, p.696.
- 46 *Ibid.*, p.707.
- 47 *Ibid.*, p.705.
- 48 *Ibid.*, p.706.
- 49 George Sand, *Laura, voyage dans le cristal*, Toulouse, Ombres, « Petite bibliothèque Ombres », 1993, p.70.
- 50 *Ibid.*, p.34.
- 51 *Ibid.*, p.74-5.
- 52 *Ibid.*, p.92.
- 53 *Ibid.*, p.47.
- 54 *Ibid.*, p.149.
- 55 Marcel Brion, « Le voyage initiatique », art.cit., p.30.
- 56 Jules Verne, *Voyage au centre de la terre*, Paris, Librairie générale française, « Live de poche », 1966, p.362.
- 57 Olivier Sauzereau, « La science dans l'œuvre de Jules Verne », Colloque « Jules Verne, la science en drame », 4 mars 2005, Musée d'histoire naturelle de Nantes ; Olivier Sauzereau, « Jules Verne, explorateur de mondes connus et inconnus », Colloque « Jules Verne du XIX<sup>e</sup> siècle au XXI<sup>e</sup> siècle : sciences, techniques et utopies », 10 juin 2005, Hôtel de ville de Paris.
- 58 ポン=ジェスト及びこの事件については、以下を参照。Volker Dehs, « Un certain René de Pont-Jest... et quelques rencontres » ; Volker Dehs, « L'affaire Pont-Jest : la correspondance entre Jules Verne, Pierre-Jules Hetzel, René de Pont-Jest et leurs avocats (février 1865 à octobre 1877) », *Bulletin de la société Jules Verne*, N° 135 (dossier « Affaire Pont-Jest »), 2000.
- 59 Volker Dehs, « Un certain René de Pont-Jest... et quelques rencontres », p.13.
- 60 *Correspondance inédite de Jules Verne et de Pierre-Jules Hetzel*, tome III, Genève, Slatkine, 2002, pp.358-9.

## Naissance des *Voyages extraordinaires* : les contextes culturels de deux des premiers romans de Jules Verne

---

Masataka ISHIBASHI

Tous les romans de Jules Verne que publie Pierre-Jules Hetzel sont censés constituer un cycle romanesque, *Voyages extraordinaires*. Pourtant, il est évident que cette entreprise gigantesque ne s'est pas imposée d'emblée entre l'auteur et son éditeur. Même s'il est impossible de négliger l'influence du dernier, il y a bien chez Verne une impulsion propre, un mouvement cohérent et irréversible. C'est dans l'interaction de ces deux facteurs que l'idée de cycle romanesque prend forme et aboutit à la publication de l'édition illustrée des *Voyages et aventures du capitaine Hatteras* avec une préface de Hetzel (1866). Il est à noter qu'il s'agit du deuxième roman après *Cinq semaines en ballon* (1863) et que la publication en feuilleton du cinquième, *Les Enfants du capitaine Grant* (1867), se poursuit dans *Magasin d'éducation et de récréation*, revue fondée par Hetzel en 1864. Aussi peut-on penser que, avant *Grant*, ni Verne ni Hetzel ne discernent clairement qu'une direction générale. Il est significatif que le premier contrat exclusif entre les deux (signé juste après la remise du manuscrit de *Hatteras*) mentionne *Grant* mais non pas les deux romans qui seront écrits avant celui-ci : *Voyage au centre de la terre* (1864) et *De la terre à la lune* (1865). C'est donc l'apparition inattendue mais nécessaire de ces deux romans et surtout le processus par lequel Verne écrit coup sur coup *Hatteras* et *Voyage au centre de la terre* qui sont capitaux dans la naissance des *Voyages extraordinaires*. Le but de la présente étude est d'analyser ce processus, en tenant compte des contextes culturels.

La continuité entre *Cinq semaines en ballon* et *Hatteras* est évidente. La démarche commune aux deux romans consiste à résumer toutes les explorations déjà effectuées réellement, voire toutes les connaissances amassées par celles-ci sur les régions concernées, et à les relier en comblant par des fictions les vides entre elles. Chez Verne, il y a toujours un jeu entre le caractère local du savoir positif (que reprend le roman) et le désir de globalisation qui anime la fiction. Si l'originalité de *Cinq semaines* réside dans l'efficacité avec laquelle un ballon impossible à diriger fait du savoir un spectacle, *Hatteras* associe la figure de capitaine comme « maître après Dieu » au « point suprême » sur le fond d'un événement actuel. Verne situe le départ de son héros anglais juste après le retour du *Fox* commandé par McClintock. Grâce à cette expédition envoyée par Lady Franklin, on apprend enfin ce que sont devenus John Franklin et sa troupe partis 14 ans auparavant à la recherche du passage du Nord-Ouest. La marine britannique se voit accusée d'avoir investi trop d'énergie à des recherches qui, elles, étaient restées vaines. Maintenant que le mystère de Franklin a été élucidé, on ne peut plus compter - au moins pendant quelque temps - que sur une ardeur toute personnelle pour la conquête du pôle. Hatteras incarne cette volonté individuelle. S'il souligne le côté nationaliste de son entreprise, c'est qu'il est obsédé par la crainte malade que le vide laissé par les Anglais ne soit tentant pour d'autres pays. Cette

---

situation lui permet de cacher sous l'apparence du nationalisme son véritable objet : le volcan au pôle. Ce feu doit être là pour manifester l'inaccessibilité ultime du point suprême - même si ce point peut être situé géographiquement. C'est aussi que le plus haut point du monde et ce plus bas point qu'est le centre de la terre (deux notions symboliques), se trouvent mis en communication par une idée scientifique : c'est en réalité, semble-t-il, le « feu central » qui a exercé son pouvoir d'aimantation sur Hatteras.

Le véritable sens du feu polaire ne se sera-t-il révélé à Verne qu'après la rédaction de *Hatteras* ? C'est donc que, non moins qu'Hatteras, Verne fut lui aussi sous l'emprise du feu central pendant l'écriture de *Hatteras* dans la mesure même où il n'était pas conscient de la signification du volcan polaire. La liberté que Verne se permet dans *Voyage au centre de la terre* est telle qu'elle nous semble difficile à expliquer autrement que par sa délivrance de l'envoûtement du feu central. Or cette libération n'a été rendu possible, croyons-nous, que grâce à un « conte bleu » publié juste avant la composition de *Voyage au centre de la terre* : *Laura* de George Sand, récit d'un voyage fantastique au centre de la terre par une ouverture du pôle. Plus que les points communs entre ces deux histoires souterraines, ce qui nous importe, c'est que *Laura* constitue une protestation contre le rôle de la femme dans la conception du feu central chez quelques romantiques. Du *Runenberg* de Ludwig Tieck à « Histoire de la reine du matin et de Soliman, prince des génies » de Gérard de Nerval en passant par *Les Mines de Falun* d'E. T. A. Hoffmann, le feu central (ou les pierres qui emprisonnent l'élément du feu) est toujours associé à un savoir absolu auquel il est impossible d'accéder sans la transmutation du sujet, voire la mort. Entre la tentation de ce savoir souterrain et le bonheur terrestre se produit une compétition, que Tieck et Hoffmann assimilent à celle entre deux femmes : une sorte de déesse et une femme ordinaire qui représente le prosaïque. La comparaison s'impose entre *Laura* et *Les Mines de Falun* (que le récit de Sand mentionne) : pourquoi une fiancée ordinaire doit-elle être abandonnée et pour quelle raison une femme surnaturelle doit-elle représenter le côté maléfique de l'incitation à l'absolu ? Grâce à un système métaphysique, *Laura* joue le rôle des deux femmes pour se faire accepter telle qu'elle est par le narrateur amoureux d'elle. Au contraire, dans *Voyage au centre de la terre*, Graüben encourage Axel à partir, mais elle reste cachée tout au long du voyage en attendant au point de départ le retour de son fiancé ; sans arrière-fond comme la plupart des personnages verniens, elle ne quitte pas l'ordre du prosaïque. Verne réussit ainsi à se débarrasser du côté moralisateur de *Laura* et, en même temps, de l'envoûtement fatal du feu central. Le passage du savoir à la fiction chez Verne ne s'effectue pas par la transmutation du sujet, il est sans rupture. Cette « démystification » - le prolongement de la prosaïcité - se poursuit dans le voyage lunaire et c'est là que s'établit la base de tous les *Voyages extraordinaires* qui suivent.